



学会のレセプション会場にて

ボストンに渡米し一年が過ぎようとしています。今年のボストンの冬は猛烈に寒く、大雪になる日や -20°C まで達することもありました。先日まで肌寒い気候が続いていましたが、5月末になりようやくボストンも暖かい気候になってきました。この1年の留学生活では、想像通りであった部分と予想しなかったことが共存していたと言えます。半年前に提出した前回の報告書では大学院留学までのプロセスについて報告しましたので、今回の報告書ではMedia Labでの生活について報告させていただきます。

中から見たMedia Lab

MIT Media Laboratory (通称Media Lab) は1985年に設立されたSchool of Architecture and Planningに所属する研究所です。一昨年に伊藤穰一が所長になったことや副所長の一人が日本人であることもあり、日本でのテレ



Media Lab内の一室

びや雑誌などのメディアへの露出が増え、日本での知名度も上がってきているようです。Media Labの研究はそういったメディアに多く記載されていると共にオンラインで広く公開されているので、本稿ではメディアでは記載されないような学生視点から見たMedia Labについて報告させていただきます。

Media Labは研究所であるとともに、私が所属しているMedia Arts and Sciences Program (MAS) という大学院プログラムを運営しています。Electrical Engineering and Computer ScienceやMechanical Engineeringの学生がMedia Lab内の研究グループに所属することもあります。大半の学生はMASに所属しています。一学年25人程度であり、MASのPh.D. programに進学するためにはMASのMaster degreeを取ることが必要です（すでにMaster degreeを持っている場合は、advisorとの相談の上でMaster degreeをスキップすることも稀にあります。）。MASは必修の授業というものがなく、米国の他の米国のプログラムに比べて授業の重要度が低いように思います。神経科学、Human Computer Interaction、ロボットなど様々な分野のグループが集まっているので枠組みを決めることが難しい一方で、このような方針は「実際にモノを作ることで学習 (Learning) する」という考えに基づいています。しかし、個人的には米国のPh.D. programにおけるコースワークによる基礎固めを非常に魅力的に感じていたので、この点に関しては少し残念に感じているところです。実際の

ところ、このシステムの恩恵を受けている学生と受けていない学生に二分しているように感じます。

また、米国の他の大学院プログラムと比較することはできませんが、日本で私が所属していた大学院と大きく違うことがあります。それは、他グループの学生との交流が活発であるということです。複数のグループが一つの部屋で共存し、コミュニケーションを活発化させるように建物自体が設計されており（日本人が設計！）、日常的に全く違うグループの学生と話すため、その会話からコラボレーションが始まることが多くあります。Media Labにはアーティスト・デザイナー・サイエンティスト・エンジニアが共存しているので、研究面を抜きにしても色々なことを話すことで自分の考えが変化していることを感じます。また、Media Labの多くの学生が自分たちは他のアカデミックな分野とは違うという意識を持っており、そういった意識がコミュニティの結束力を高めているように感じます。

英語とコミュニケーション

一度も英語圏に住んだことがない人にとって、英語は学位留学をする際の大きな障害の一つです。Media Labの学生はおよそ半数がアメリカ人、残りが他国からの留学生です。しかし、今年度Media Labのプログラムに入学した学生のうち英語で教育を受けたことがない（or 働いたことがない）学生は私だけでした。MITの大学院留学体験記などでは英語ができなければ周囲から完全に無視されるなどということがよく言われていますが、同期の中で段違いに英語ができなかったものの、そのせいで存外な扱いを受けることはありませんでした。その一方で、気さくに話しかけてくれる友人たちが話していることが聞き取れないことが多く悔しい思いをすることがよくありました。そのような状況に陥ってしまうことが嫌で、自然とラボ内で人と会話する機会を避けていたように思います。

その一方で、入学前の大きな一つの決断が功を奏しました。Media Labber（Media Labに所属している人）と一緒に住むことにしたことです。ボストンの家賃は高く、シェアハウスをすることが一般的です。その一方で、大学院生には寮に住むという選択肢もあります。渡米直前まで「MITの寮に住んで、他のプログラムの大学院生と仲良くなる！」などと考えていましたが、Open Houseイベントで知り合った同期のインド人から一緒に住まないかという誘いが舞い込んで来ました。友人からインド人とのルームシェアは避けた方が良いなどという話を聞いていたので、この誘いの返答には悩みました。最終的にMITの寮

は狭い上に家賃が高いという理由で彼と住むことに決め、一学年上のMedia Labberであるアメリカ人を加え三人でルームシェアをしています。結局のところ一緒に生活することに全く支障はなく、愚痴や相談をし合っている内に彼とは最高の友達になりました。彼のお陰で、私の英語能力は上昇し、Media Lab内で友人も多くなり、研究での悩みに押し潰されずに生活できていると思います。

英語が不得手な内は、社交性が異常に高くない限り人に話しかけることが億劫になります。学位留学はもちろん英語ができることが前提ではあると思いますが、一年半前Media Labを受験のために訪れた際にはコーヒーを買うことすら苦勞していました。インドから渡米し、別の米国大学院で修士号を取得し、数年働いた後Media Labにやってきたルームメイトに言われた印象的なことがあります。「米国の大学院は人と知り合うことができる最高の環境だよ？自分が前の大学院にいたときはインド人同士でいつも行動していて、他に全く友達を作らなかった。会社に就職してから、もっと色々な人と大学院で友達になっておけば良かったと思った。会社では小さなチーム内の人としか話すことがなくて、外に広げることができなかった。だから、二回目の大学院であるMedia Labではできるだけ社交的になって、積極的に色々な人と話すようにしている。」これは間違いのないと思います。実際、ラボ内での彼の知名度は高く、皆に好かれている印象です。ラボ内を見回してみると、社交的な人ほど成功している印象があります。英語というハンデキャップはありますが、2年目はできるだけ社交的になることが一つの目標です。

このようなコミュニケーションの重要性について渡米後気付いたことがもう一つあります。それは学会での立ち振舞いについてです。日本ではこのような指導はされなかったのですが、私のアドバイザーはコミュニケーションやネットワーキングを重視しており、学会では20人以上MIT外の人と会話してくることをラボメンバーに義務付けています（アドバイザー自身はトークセッションには参加せず、いつもソファで誰かと話しています笑。彼曰く、学会はポスターセッションとレセプションパーティーが最も大事らしいです。）。しかし、非英語圏の人にとって、見ず知らずの人に不得意な英語で話しかけることは極めて難しいことでしょう。実際、ほとんどの日本人はいつも固まって他の国の研究者と積極的に会話していることを見かけません。私も一年前の学会に参加した際は、日本人とばかり話をしていました。しかし、英語でのコミュニケーションに慣れて以来、学会やMedia Labのスポンサーイベント（半年に一度スポンサーに研究を発表するイベント）では積極的に色々な人に話しかけるようにしています。こうした会話

の重要性を示すかのように、興味深い情報を知ることもよくある一方で、そこから生まれた新しいプロジェクトを始めようとしています。日本の研究室に所属したままであれば、おそらく手に入れることができなかつたと思われるこのような能力を得ることができ、大変嬉しく思っています。

学部4年生から研究ということ始めて、すでに4年経ちます。学部時代・修士課程時代、研究が大好きでした。しかし、この1年は改めて研究というものは難しいと感じていました。私が研究してきた材料工学や細胞生物学など伝統的な研究分野とMedia Labで行われている研究は質や評価軸が大きく違うことが大きな悩みの原因です。そして、その違いにまだ適応できておらず、「研究とは何なのだろう．．．研究は何のためにやるのだろう．．．何をすれば良いとされるのだろう．．．」などという根本的な悩みに悩まされています。それに加えて、研究は実力だけではなく色々な運にも大きく依るのだなと感じています。この1年は研究面で生産的でなく、路頭に迷っているような状態でした。しかし、今ようやく光を見出しつつあると感じています。次回の報告書では、この苦悩の変遷と解決を綴れるように精進したいと思います。